

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.148

2005年9月

特集 名古屋大学万博記念国際フォーラム



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

41 NUマーク 一名大の学章

図案化された Nagoya University の「NU」に、篆書体の「名大」を合わせた、通称NU（エヌ・ユー）マークは、名大の象徴たる学章として、学生バッジや学旗、印刷物、名大グッズなどに広く用いられています。

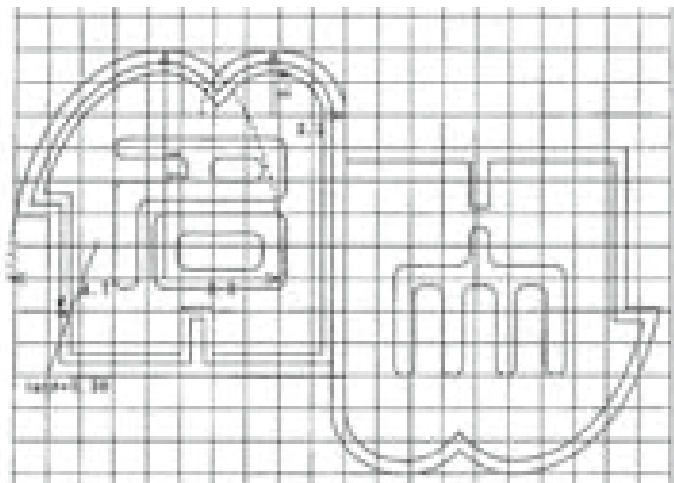
このNUマークが公式に名大の学章になったのは最近のことで、1998（平成10）年に「名古屋大学学章取扱要項」が定められてからです。さらに今年3月には、「名古屋大学学章規程」が制定され、図案のサイズや字の傾き具合も決められています（図2）。色の部分は、本来は黒ですが、名大の尊厳や品位を損なわなければ、名大カラーの濃緑をはじめ特に制限はありません。

ただこのマークは、公式化される以前から長く使われてきたものです。もともとは学生バッジのデザインですが、バッジとしてはそれ以前から、1953（昭和28）年に開学記念行事として記念祭実行委員会が募集選定した、通称シャチバッジ（図3）がありました。その他にも、黒地に金文

字で「名大」と書いた業者製作のバッジも使われていましたが、いずれもデザイン的に評判がよいとはいえなかったようです。

そこで1958年には、学生部の発案で新しい学生バッジが作成されることになりました。名古屋大学学生バッジ選定委員会が組織され、図案の学内公募が行われました。その結果、68点もの応募の中から、教養部（法）2年の北川英之君の作品が選ばれ、これをもとにしてNUバッジが作られたのでした。

この頃、1954年から56年にかけて、「若草もゆる」、「大空に光はみてる」、「若き我等」と、現在でも歌われている学生歌、応援歌も学内募集であいついで選ばれています。1949年に新制大学としてスタートしながらも、施設が各地に分散する「タコ足大学」であった当時、こうしたバッジや歌は、名大生としての一体感を形として示す、数少ないものだったのかもしれません。



1	2
3	4

- 1 NUマーク
- 2 NUマークの図法（「名古屋大学学章規程」）
- 3 シャチバッジのデザイン
- 4 四ッ谷3丁目交差点の看板

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.149

2005年10月

高等研究院第1回スーパーレクチャーを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

42 豊田講堂と勝沼胸像

名古屋大学東山キャンパスにある豊田（とよだ）講堂の南側ロビー内には、1体のブロンズ胸像があります（写真1）。これは、日本芸術院会員の清水多嘉示（たかし）製作による本学第3代総長・勝沼精蔵（1886-1963）の胸像で、本学医学部第一内科同窓会から寄贈されたものです。

豊田講堂が1960（昭和35）年にトヨタ自動車工業株式会社（現・トヨタ自動車株式会社）から建設寄付を受けたものであることについては本連載ですでに触れましたが、その建設寄付をトヨタ自動車工業に持ちかけたのが勝沼精蔵第3代総長でした。

本学では、1950年代後半以降、東山キャンパスの整備が進むにつれて、戦前の名古屋帝国大学時代からの念願であった図書館と大学講堂の建設寄付の実現が課題となっていました。しかし、図書館と講堂の同時建設が困難な状況のなかで講堂優先の方針が定まったことをうけて、勝沼はトヨタ自動車工業の石田退三社長に対して、同社の創設者であり、発明王といわれた豊田佐吉の記念事業として1億

円規模の講堂の建設寄付を打診しています。これをうけた石田社長は、1958年11月に「折角寄付するのだから恥ずかしくないものを」と2億円規模の建設寄付に応じたのでした。

勝沼の要請にこたえる形で始まった豊田講堂の建設は、1959年3月に着工し、翌年5月には竣工しました。しかし勝沼自身は、1959年3月末に任期満了にともなって総長職を退いていました。その後、勝沼は1963年に他界し、豊田講堂で告別追悼式が挙行されました。

1965年11月、医学部から勝沼胸像完成の報告をうけて、11月3日に豊田講堂で除幕式を行うことが学部長会で認められました。除幕式には、勝沼家遺族や篠原卯吉第5代学長など関係者約200名が参列しました。

勝沼胸像の設置場所は、除幕式から約10日後の評議会を経て豊田講堂ロビーとすることが認められました。

なお、勝沼精蔵の胸像は、豊田講堂のほかに医学部図書館内にも設置されています。



1 | 3
2 |

- 1 豊田講堂ロビー内の勝沼胸像
- 2 勝沼精蔵ブロンズ胸像
- 3 胸像台の銘版

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.150

2005年11月

名古屋大学ホームカミングデイを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

43 嚶鳴寮から国際嚶鳴館へ

2002（平成14）年、嚶鳴（おうめい）寮の老朽化と、増加する外国人留学生に対応するため、日本人学生と留学生が共同生活を営む混住型施設として、国際嚶鳴館が竣工しました。定員は約300名、居室は全て個室（バス・トイレ・エアコン付）で、3棟のうち1棟は9階建ての高層建築となっています。

これにともなって取り壊された嚶鳴寮は、1961（昭和36）年に完成したのですが、その系譜は大正時代にまでさかのぼることができます。

嚶鳴寮は、1920（大正9）年に創立された名古屋高等商業学校の構内（現名市大川澄キャンパス）にあった学生寮をその起源としています。嚶鳴とは、鳥が友を求めて鳴きかわすさまをいい（『詩経』小雅の伐木の詩による）、江戸時代の儒学者で、米沢藩主上杉鷹山の師としても知られる、細井平洲（愛知県東海市出身）が江戸に開いた私塾「嚶鳴館」からその名がとられたともいわれています。

戦後の1949年、名高商は新制名古屋大学に包括されて、経済学部の母体となりました（桜山キャンパス）。同時に嚶鳴寮も、そのまま名大の学生寮として引き継がれます。この当時は、学生の約15%が寮生活をしていました。

そして1959年、名古屋市が東山キャンパスに新築した校舎と桜山キャンパスを交換する方式で経済学部の移転が行われると、国際嚶鳴館のある昭和区高峰町の敷地に新しい学生寮が新築され、嚶鳴寮の名も継承されました。

大学文書資料室では、嚶鳴寮に関する資料をほとんど所蔵していません。このままでは、その歴史が風化してしまいかねず、本格的な資料の収集が急務であると考えています。すでに廃止された、豊川分校の振風寮、安城市の碧明寮、瑞穂分校の旧八高学寮などもふくめた、名大学生寮に関する資料の情報をお持ちの方は、どんな些細なことでもぜひ大学文書資料室までご一報ください。



1	2	3
	4	

- 1 名高商の嚶鳴寮（大正時代）
- 2 1955年頃の嚶鳴寮食堂
- 3 1991年頃の嚶鳴寮
- 4 国際嚶鳴館

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.151

2005年12月

名古屋大学国際学術フォーラム・上海事務所開所式を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

44 愛知医専・愛知病院正門遺構

名古屋大学鶴舞キャンパス（名古屋市昭和区）は現存する本学キャンパスのなかで最も古く、1914（大正3）年に本学医学部の前身校である愛知医専（愛知県立医学専門学校）および愛知病院の移転先として設けられました。以後、鶴舞キャンパスは、県立愛知医科大学（1920～）、官立名古屋医科大学（1931～）、名古屋帝国大学医学部（1939～）、旧制・新制名古屋大学医学部（1947～）の各キャンパスとしての約90年のあゆみをへて現在に至っています。

この間、施設の拡充・更新や戦災などによって、鶴舞キャンパス内に戦前の面影を残すものはほとんどなくなっています。しかし、同キャンパス内には、1914年移転当時の愛知医専・愛知病院の門と圍障がそれぞれ遺構として残されており、本学の歴史上も貴重なものとなっています（写真1、2）。

これらの遺構は、本学附属病院病棟の新設工事が1999

（平成11）年に行われた際、本学医学部学友会からの建設寄付によって復元保存のための工事がなされたものです。この工事では、遺構の構造補強をはじめとして洗浄・補修、鉄部など欠損部の新設がなされるとともに、夜間照明装置や銘板の設置も行われました。

遺構の復元保存にあたっては、遺構の沿革調査なども踏まえて本学の施設部および本部施設計画推進室（現・施設管理部および施設計画推進室）において計画案の検討が進められました。遺構は、1930年の愛知医科大学時代における圍障新設・改修工事以降、1941年に戦時下の鉄材供出によって鉄柵・門扉などが外された時期までの形態にほぼ復元されているとのことでした。

なお、この愛知医専・愛知病院正門遺構の沿革や保存経緯の詳細については、本資料室編『名古屋大学史紀要』（第10号、2002年刊）を参照ください。



- | | | |
|---|---|----------------------------|
| 1 | 2 | 1 愛知医専正門遺構（手前）と名大附属病院病棟（奥） |
| | 3 | 2 愛知病院正門遺構 |
| | 4 | 3 移転当初の愛知医専正門（1914年） |
| | | 4 キャンパスマップ |

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.152

2006年1月

第13回名古屋大学科学研究オープンシンポジウムを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

45 名大グラウンド小史

東山キャンパスの東南端にある総合運動場地区（通称「山の上」）は、多くの学生がクラブ活動や全学教育科目のスポーツ実習などで利用する施設です。

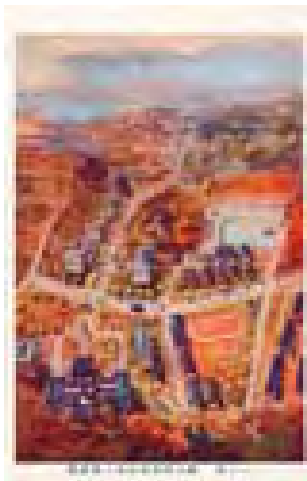
歩くとちょっとした時間のかかる、この山の上地区が整備されたのは、今から45年近く前の1961（昭和36）年のことですが、それまでの東山キャンパスの運動場は、現在の工学部4号館と5号館のあたりにありました。この場所に運動場を設置するという構想は、すでに名古屋帝国大学創立当時からあり、実際に創立後すぐにここが運動場となりました。

敗戦後も、東山キャンパスにこれ以外の本格的な運動場が増設されることはありませんでした。ただ教養部では、旧制八高から引き継いだ瑞穂キャンパスの運動場が使えました。また、桜山キャンパス（経済学部）には旧名高商運動場が、旧陸軍歩兵第6連隊兵舎跡の名城キャンパス（本部、文系学部）、愛知学芸大学安城分校の敷地を転用した

安城キャンパス（農学部）にも運動場がありました。八事にも借地のグラウンドがあったようです。

しかし、1950年代末から60年代にかけて、東山キャンパスに本部、文系学部、農学部、教養部などが続々と集結します。そうなるに東山にも本格的な運動場施設が必要となりますし、立地条件のよい旧グラウンドの敷地に学部校舎の増設を求める案も出てきました。そこで、少し前に追加取得された山の上敷地に、陸上競技場や野球場が設置されたのでした。まだこの地域の開発が進んでいなかった当時、夕方になると新グラウンドから東山動物園のライオンの吼える声が聞こえたといえます。

本誌前々号でも紹介されたように、このたび山の上の陸上競技場のフィールドに、最新の人工芝が導入されました。雨天時の使用やケガの軽減、人工芝が人体に及ぼす影響の研究など、さまざまな効用や成果が期待されています。



1	4
2	3

- 1 現在の豊田講堂方面から見た、1942年当時の東山キャンパス運動場
- 2 1943年の開学式に配布された、名帝大の建設構想を絵画化した絵はがき。右下に陸上トラックが描かれている
- 3 山の上地区が整備された当時の東山キャンパスの航空写真（赤で囲った部分が旧グラウンド）
- 4 フィールドを人工芝化した山の上陸上競技場

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.153

2006年2月

名古屋大学東京フォーラム2006を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

46 名古屋大学「職員用バッヂ」

「本学職員と外来者とを容易に識別し併せて之を^{はいよう}佩用することによって本学職員たるの気品を保つに役立つため一定のバッヂを制定して之を全学職員に佩用させる」——これは1948（昭和23）年3月に作成された簿冊『職員用バッヂ関係書類綴』に収められている「名古屋大学職員用バッヂ図案募集要綱」の目的規定文です。

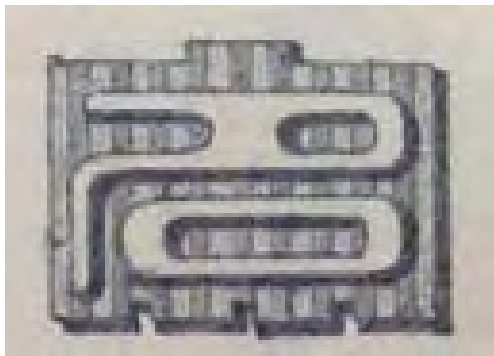
本連載第41回「NU マーク」（No.148）で1953年制定の学生向けの通称シャチバッヂに触れましたが、本学ではそれより5年前に職員用バッヂの制定が行われていました。この職員用バッヂに関しては『名古屋大学五十年史』（部局史一）において、「警備上職員バッヂを制定されたい」との職員組合の要望を受けて、通し番号入りの職員バッヂが作成されたとの記述があります。

冒頭に紹介した募集要綱は、このバッヂ制定にあたって本学在職者からの図案募集を行った際に作成されたものです。同年3月5日に締め切られた図案募集には約140件の応募があり、総長ほか各部局長等15名の審査員による投票が行われましたが、採用図案を決めるに至りませんでした。

そこで、同年4月15日締め切りで再募集を行ったところ約30件の応募があり、審査の結果、医学部教員の応募図案がバッヂのデザインとして採用されました（写真1）。

その後、職員用バッヂは同年内に2000個が製作され、部局別の番号区分にしたがって全職員に貸与されています。残念ながら、大学文書資料室には当時の職員用バッヂが保管されていませんが、おそらく最終的には写真2のようなデザインで製作されたものと思われます。また、職員用バッヂの貸与に際しては1949年2月に「職員用バッヂ取扱要項」が定められて貸与台帳による管理が行われ、職員には通勤途上および公務執行中の着用、大学離職時の返還ならびに破損・紛失時の実費弁償などが義務づけられていました。本資料室に残されている資料によると、1951年からの4年間に少なくとも40個の紛失届が提出されています。

なお、本学では職員用バッヂとは別に、1948年に写真3のようなデザインの警務員用^{きしやう}徽章が制定されています。これは、当時、被服規程に基づく制服の貸与が困難であったため、代替措置として行われたものでした。



1 | 3
2 |

- 1 第2回募集で採用された図案（オリジナル、鉛筆書き）
- 2 オリジナル図案に修正を施したと思われるカラーデザイン
- 3 警務員用徽章の図案メモ（鉛筆書き）

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.154

2006年3月

名古屋大学インターナショナル・アドバイザリーボードを開催



47 名古屋大学と歌

一昨年、東京大学では、新校章とともに「東京大学の歌」を定めることになり、歌詞を一般公募しましたが、名古屋大学では1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立されて以来、校歌や大学の歌と正式に呼ばれるものを持ったことはありません。たとえば入学式では、1956年に学内公募で選定された「若き我等」が、歓迎の歌として混声合唱団によって歌われますが、「学生」歌であるため、大学院関係の式典では歌われていません。

しかし、名帝大創立以前の前身諸学校の多くには、それぞれ校歌が見られます。名大史において明らかになっている最も古い校歌は、1908（明治41）年に創立された旧制第八高等学校（旧教養部の前身）の校歌です。ついで、1920（大正9）年に愛知県立医学専門学校から昇格した県立愛知医科大学（医学部の前身）では、昇格祝賀歌の1つで、第3師団軍楽隊作曲・石田元季教授作詞のものが校歌として歌われました。また官立となった後の1935年には、山田耕筰

作曲・公募作詞による「名古屋医科大学の歌」が選定されています。1920年創立の名古屋高等商業学校（経済学部の前身）でも、その翌年に校歌が作られました。

もともと、学生の多くが寮生活を送っていた戦前においては、校歌よりも寮歌の方が学生だけでなく市民にも親しまれ、盛んに歌われました。たとえば八高では、いわゆる校歌よりも、代表的な寮歌「伊吹おろし」の方が圧倒的に有名であり、現在の名大でも体育会や学生寮などで歌い継がれています。

寮歌といえば、教育学部の前身にあたる岡崎高等師範学校には校歌がなく、寮歌が校歌であると位置づけられています。これは同校が1945年の敗戦の直前に創設され、さらにその直後に空襲で校舎が焼失するなど校歌を作る余裕がなく、名大へ包括されたのち1952年には廃止されてしまったからでもあったようです。

石田元季 作詞
後藤裕 作曲
奥美野古 次作曲
尾関 而列曲

Moderato

雄たけびあげ、高らかに
黒潮越えて響くまで
我等の大学の歌々詞
遂に決定へ



石田元季 作詞

水鏡官立に移官されて五年、吾々は此の間隙として斯界に勇躍しつゝある大衆の愛を感得らばに議歌せんと希望し昨年第一回の「天學歌集」を發刊し、次いで本年第二回の題意を求め、幾多逸才を求め、まことに過去に類を見ざるほどの發展を遂げ、吾々物々の間に發見し得る竹筒をみて實に力強い何かを感じた。

本學元教授に有名なる石田元季先生の補筆を持ち、寮歌の『名古屋醫科大學の歌』の出現し、此は諸氏と共に喜びに堪えない。

寮生諸君本年度の一大政變として特筆すべく、追つて此の曲が發取も近く、諸氏の口をついて高らかに歌はれることとなるものである。

一 東海の天曉け初めて
久遠の生命限りなき
地上の光華集めつゝ
み空に挿ぐ深みぞと

二 雲霧にほよほ時
力に崩せて照り徹る
高く大空に響きては
杏林水動の榮あれ

三 眞理の星を望みては
前途に永劫の光あれ

四 國のみやの原頭に
愛の光を象徴する
光榮の光を掲げては
學園永劫の榮あれ

五 大徳の照るところ
黒潮越えて響くまで
遂に使命に勇みては
傑力に永劫の勝利あれ

雄たけびあげ、高らかに
救世の任身に帯ぶる
新興の意氣天を衝く

- 1 「名古屋医科大学の歌」の歌詞決定を報じる『名大友会報』創刊号。これに、当時すでに世界的な作曲家であった山田耕筰が曲をつけた。
- 2 八高の寮歌集（1978年刊）。寮歌などが100曲以上収められている。
- 3 岡崎高等師範学校振風寮寮歌（『岡崎高等師範学校五十年誌』より）。その哀調を帯びたメロディが寮生はじめ学生に愛唱された。

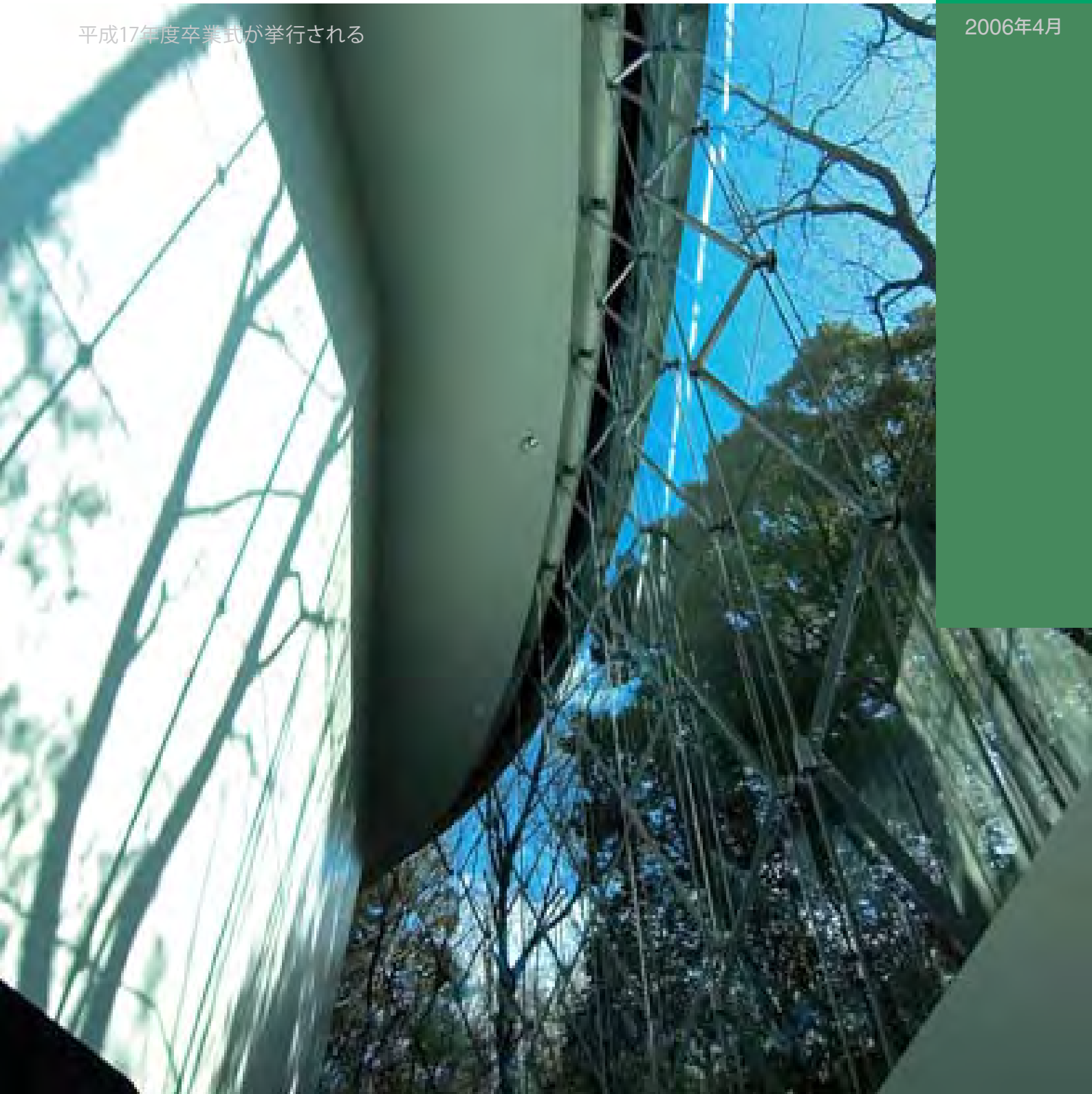
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.155

2006年4月

平成17年度卒業式が挙行される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

48 揚輝荘衆善寮－戦前名古屋の留学生宿舎

今年1月、松坂屋創業家第15代伊藤次郎左衛門祐民氏の別荘である「揚輝荘」(名古屋市千種区)の主要施設が2007(平成19)年3月に名古屋市に寄贈されて一般公開されることが19日付け朝日新聞に報じられました。大正から昭和初期にかけて建設された揚輝荘は、覚王山日泰寺の東側に位置し、山荘風建築の「聴松閣」や和洋折衷建築の「伴華楼」などが有名です。

ところで、戦前この揚輝荘の敷地内には、主にアジアの外国人留学生が下宿していた衆善寮が設けられていました。戦前の名古屋には、アジアなどから多数の留学生が来日して、本学の前身諸学校である第八高等学校や愛知医科大学などで学んでいました。衆善寮の起源は、祐民氏が日本とタイとの友好事業の一環として名古屋日暹協会(のちの名古屋日泰協会)を設立して、1936年に3名のタイ人留学生を受け入れたことにあります。

その後、衆善寮では、モンゴル・中国・朝鮮民主主義人民共和国からの留学生も受け入れるようになり、日本人学生も入寮するようになりました。上坂冬子著『揚輝荘、ア

ジアに開いた窓』(1998年刊)には揚輝荘(衆善寮)における留学生の生活が描かれており、戦前期、日本とアジアとの関係が悪化する中であっても、衆善寮内では宮城遙拝もなく、スプーン・フォークも用意されており、自由で友好的な雰囲気が保たれていたとされています。また、食堂やテニスコートなどの施設設備も整えられており、専属の料理人も雇用されていました。これは当時の寮長であった三上孝基氏の人柄や尽力によるものであったといわれています。

揚輝荘は、1945年3月の名古屋大空襲の際に大半を焼失し、衆善寮も自然に廃寮となりました。

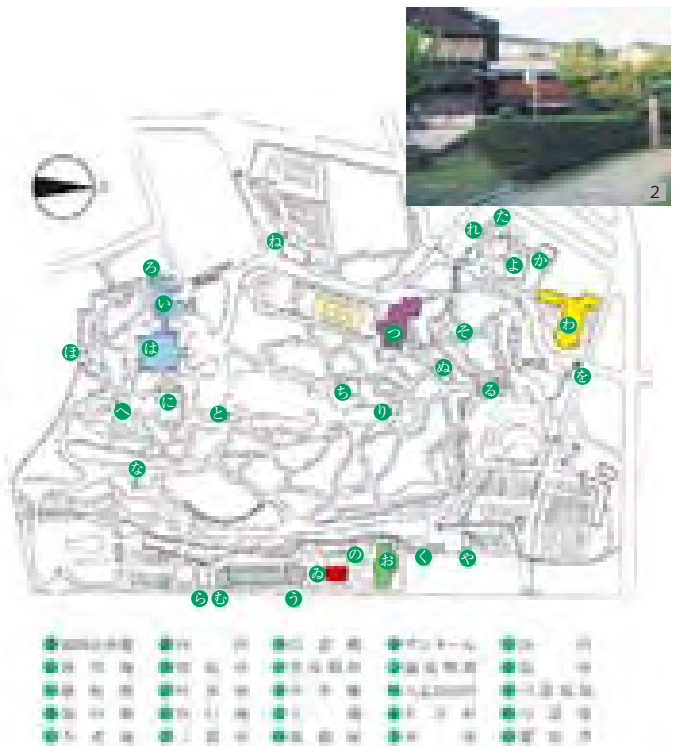
なお、当時の揚輝荘内には全長約1.5キロメートルにおよぶ地下トンネルが設けられていたことが知られていますが、その建設時期や目的などは今日も明らかではありませんが、三上寮長の日記には、戦時下の1944年3月に極秘来日した汪兆銘の療養場所としてこの地下トンネルの利用を打診されたという記録が残されているとのこと(2006年12月29日付中日新聞)。

揚輝荘の建物配置図

- (聴松閣) タイ留学生が生産していた建物
- (衆善寮) 三上孝基寮長の家業と日本人留学生が生産していた建物
- 中国人留学生が生産していた建物
- (聴松閣) 日本人留学生が生産していた建物
- (聴松閣) 同上
- (伴華楼) 食堂
- テニスコート
- 気流塔



井上俊本学名誉教授のお話による



揚輝荘(ようきそう)の建物配置図 CD-ROM版「名古屋大学の軌跡—国際社会との知的交流—」より

- 1 聴松閣(ちようしょうかく)「あいち地域資源デジタルアーカイブ」ウェブページより
- 2 伴華楼(ばんがろう)の全景「あいち地域資源デジタルアーカイブ」ウェブページより

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.156

2006年5月

平成18年度入学式が挙行される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

49 鏡ヶ池 一名大の70年とともに

1939（昭和14）年に名古屋帝国大学として創立され、まもなく70年をむかえる名大ですが、残念ながら東山キャンパスには当時からの建築物は残っていません。ただ、創立以来名大とともにあり、その歴史を見守ってきたものとして、鏡ヶ池があります。キャンパスの北西端に位置する、面積約11,500㎡の大池です。

この鏡ヶ池は、もともとは農業灌漑用の溜め池でした。その後、大正末期から、この一帯の土地区画整理事業が始まりましたが、あえて埋め立てず、自然の風趣を保存するために残されたのです。

東山キャンパスの敷地は、名帝大の創立とほぼ同時に、地域の土地区画整理組合から鏡ヶ池とともに無償で寄付されました。渋沢元治初代総長は、「緑の学園」をテーマとするキャンパス構想をかかげ、植樹に力を入れましたが、鏡ヶ池の水景もその重要な一環でした。大学の外周に堀を

設け、そこへ鏡ヶ池から滝を落とすとか、池の南側を風致地区にして、学生集会所を建てるなどの計画が立案されています。当時の鏡ヶ池は、現在の2倍くらいの面積があり、形も正方形に近い台形でした。現在の工学部1号館やベンチャービジネスラボラトリーなどの地区はかつて池だったのです。

ただ学部が東山への集結が始まり、平坦な敷地が少なくなると、風致ばかりを重視するわけにはいかなくなりました。1956（昭和31）年に、工学部拡張のため第1次の埋め立てがなされ、さらに1979年度にも埋め立てられて、現在のような細長い台形になったのです。

しかし、今でも鏡ヶ池は、貴重な水景であると同時に、さまざまな水生生物や野鳥も観察でき、春には桜の名所となるなど、名大の憩いの場であり続けています。



- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 2 | 1 1947（昭和22）年当時の米軍撮影による航空写真（国土地理院所蔵）。現在の北部厚生会館や工学部7号館のすぐ近くまで池であった。 |
| 4 | 3 | 2 1970（昭和45）年当時。第1次の埋め立て後だが、まだ現在より幅が広い。 |
| | | 3 1985（昭和60年）当時。第2次埋め立てにより、現在の形になった。 |
| | | 4 現在の鏡ヶ池付近図 |

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.157

2006年6月

平野総長が中華人民共和国を訪問 — 第4回日中学長会議に出席 —



50 第11回名大祭 —1970年代の名大祭—

2006（平成18）年6月1～4日、今年も本学恒例の名大祭（第47回、テーマは夢源^{むげん}）が開催されました。本連載では、ちょうど1年前に第38回（No.145）で第1回名大祭を取り上げました。今回は、その10年後の第11回名大祭のようすを紹介します。

第1回名大祭は、いわゆる「たこ足大学」の解消（東山キャンパスへの集結）を背景に、「60年安保闘争」問題や伊勢湾台風被災者救援活動などを契機に盛り上がりをもせた「学生運動」の一つの結晶として始まりました。その後、「学生運動」の分裂と混乱の時期を経て、1960年代後半には本学でも鶴舞・東山の両キャンパスで「大学紛争」が起きました。第11回名大祭は、こうした時代状況の中で、「名大祭活動を通じて…自らの学生像を追求してきた。…一人ひとりの学友が考え、悩み、怒り、不満に感じていること、喜びを感じていることを率直に話し合う中で、1970年代の初頭にふさわしい大学祭をつくりあげようとしてきた」(第11回名大祭アピール) ものであったとされています。

「変革にいとむ青春—新しい歴史厳肅に迎える我ら 真理への情熱を燃やし 統一と団結の鉄槌^{てつひ}を鍛えん—」というテーマのもと、第11回名大祭は東山キャンパスを中心に5日間の日程で開催されました。“長いメインテーマと短いサブテーマ”の1960年代とは対照的に、“短いメインテーマと長いサブテーマ”が1970年代名大祭の特徴です。また、5日間の開催期間中、豊田講堂のホールではテーマ講演(全5題)や「情勢講演」「パネルディスカッション」「全学シンポジウム」「全学フェスティバル」などの全学的な規模の企画が日替わりで行われており、1980年代以降の名大祭とも一種異なった1960～70年代名大祭のスタイルを見取ることができます。

なお、パンフレット裏表紙に印刷された会場案内図にはほぼ現在の建物配置に近いキャンパスが描かれており、東山地区集結後10年間に施設設備の整備・拡充が急速に進められたことがわかります。



- 1 第11回名大祭パンフレット
- 2 名大祭会場案内
- 3 第47回名大祭テーマキャラクター「種」
「メイダイサイドドットコム」ウェブページより

